

弥生

Y a y o i

63

Fall 2016

学部長室から

羽ばたく

丹下 健

Yayoi Highlight

なぜキンギョは
海で生きられないのか?

金子豊二

農学最前線

エネルギーは自給自足で!

海津 裕

江戸時代のマスオさん

戸石七生

弥生散策

ボランティアサークル「までい」

根津の甚八

Yayoi Café

弥生講堂



東京大学 大学院
農学生命科学研究科・農学部

羽ばたく

毎年、自宅の車庫にツバメが巣作りをし、ひな鳥が巣立っていきます。巣立ちの時期には、親鳥の後を必死に追って羽ばたいているひな鳥がいたり、まだ巣に残っているひな鳥がいたりします。自分は飛べると信じて初めて巣から飛び立つ瞬間をどのように決断しているのだろうかといつも不思議に思っています。今から35年ぐらい前の学生時代の話ですが、チョウの羽ばたきの研究をされていた他の専攻の先輩が、やっと解析のための連続写真が撮れたと喜んでおられたのを覚えています。当時のカメラの性能を考えると大変な挑戦をされたことと思います。

大学は、毎年、多数の卒業生を社会に送り出しています。学生たちにとって大学は、社会で羽ばたくための力を身につける学びの場であり、人間的な成長の場でもあります。就業経験としてインターンシップに参加する学生も増えています。

これからの学生の活躍の場はより一層世界に広がり、外国人と働く機会も我々の頃に比べて格段に多くなるものと思います。文化的な背景の異なる人たちとの交流を若い時に経験することがとても大切になっています。本研究科でも学生が海外で学ぶ機会をできるだけ多く持てるように、短期海外留学や海外実習に参加する学生への経済的な支援を通して背中を押しています。挑戦をしてやり遂げる経験をすることで、学生はとても頼もしくなります。世界の人々と共に働き大きく羽ばたいてくれるチャレンジ精神に富んだ人材が多く育ってほしいと思っています。



東京大学大学院農学生命科学研究科長・農学部部長
丹下 健

「なぜキンギョは海で生きられないのか」、そんな素朴な疑問を抱いたことはありませんか。私たちは、魚類の浸透圧調節研究を進めることで、魚が様々な水環境に適応する仕組みを明らかにするとともに、基礎研究に根差した応用研究を展開しています。



水圏生物科学専攻
水族生理学研究室
金子豊二 教授

なぜキンギョは海で生きられないのか?

Why can't a goldfish live in the sea?

教えて! Q&A

浸透圧

浸透圧とは半透膜を隔てて水と水溶液を置いた場合に生じる圧力差と定義される物理化学的用語ですが、血液の浸透圧はもっぱら無機イオン(主にナトリウムイオンと塩化物イオン)によって規定されるため、血液浸透圧は塩分濃度とほぼ同義と考えて構いません。

浸透圧調節

浸透圧調節とは血液などの体液の浸透圧を生理的な許容範囲内に維持する仕組みのことで、魚の場合は、浸透圧調節器官(鰓、腎臓、腸)の調和のとれた働きによって浸透圧が調節されています。中でも鰓の塩類細胞は、塩類の取り込みや排出を担っています。

塩類細胞

魚類の鰓などに分布する塩類輸送に特化した細胞(図3)。塩類細胞の外壁に接する細胞膜(頂端膜)と体内側の細胞膜(側底膜)には様々なイオン輸送タンパクが局在し、それによって塩類細胞の輸送特性が決まります。塩類細胞が輸送する塩類はナトリウム(Na⁺)や塩化物イオン(Cl⁻)に留まらず、カルシウム(Ca²⁺)の取込み、カリウム(K⁺)やセシウム(Cs⁺)の排出にも関わっていることが分かってきました。また、鰓が未発達な発育初期の魚では、体表に塩類細胞が存在し、鰓に代わって浸透圧調節を行っています(図4)。

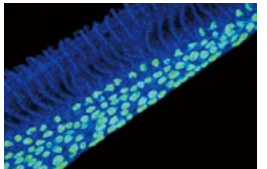
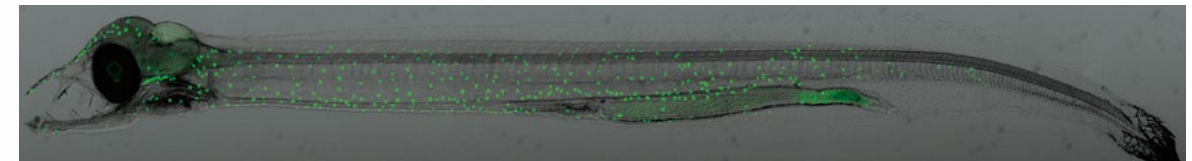


図3. 鰓の塩類細胞(ティラピア)
鰓は魚の呼吸器官であるのと同時に浸透圧調節器官でもある。鰓の塩類細胞(緑色に染色)は各種の塩類を輸送することで、血液の浸透圧を調節している。

図4. 仔魚期ウナギの塩類細胞
鰓が発達する前の仔魚期のウナギでは、塩類細胞(緑色に染色)は体表に広く分布する。

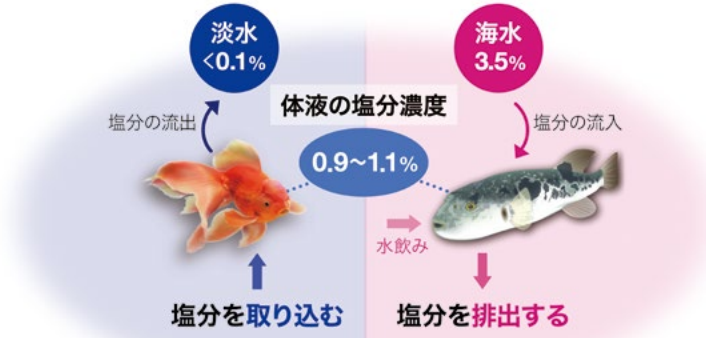


図1. 魚の浸透圧調節
魚の血液の塩分濃度(浸透圧)は、環境水の塩分濃度に関わらず海水の1/4~1/3の値に保たれている。

水で暮らす海の魚は、体に流入する過剰な塩類を鰓の塩類細胞が排出することで塩類のバランスを保っています(図1)。淡水魚の塩類細胞は塩類の取り込み、また海水魚の塩類細胞は塩類の排出にそれぞれ特化しています。これに対し、広塩性魚の塩類細胞は、環境水の塩分濃度に応じてその機能を切り替えることができます。つまり、淡水で塩類を取り込んでいた塩類細胞が、海水に入ると掌を返したように塩類を排出するようになります(図2)。このような塩類細胞の機能の可塑性の有無が、魚類の狭塩性と広塩性を分かつ分水嶺なのです。また、浸透圧調節の



図2. 狭塩性魚と広塩性魚の塩類細胞
狭塩性魚の塩類細胞は塩類の取り込みか排出のいずれかに特化しているが、広塩性魚の塩類細胞は環境水の塩分濃度に応じてその機能を切り替えることができる。

エネルギーは自給自足で！

アフリカでは、今でも電気の届かない村がたくさんあります。
また、薪や炭を使う事で森林が伐採されて森が無くなっています。
持続的に燃料やエネルギーを作り出す方法はないのでしょうか？

皆さんはジャトロファという植物を知っていますか？ 主に熱帯地方で自生している多年生植物で、その実からツバキ油のように油を絞ること（搾油）ができます。その実にはホルボールエステルという毒性物質が含まれるため、ヤギなどの食害が無く、栽培が容易だと言われています。とれた油は、バイオディーゼルに変換可能で、発電機や自動車の燃料として用いることができます。我々の研究室では、日本の政府機関、大学、そしてモザンビークの大学と協力して、モザンビークの農村のローカルエネルギーとしてのジャトロファの利活用に着目して研究をおこないました。

その中で私に与えられたミッションは、非電化村での搾油と、絞리카すからのブリケット（薪や炭の代わりになる）の製造でした。これらの工程には高い圧力（40MPa）と温度（200℃）が必要です。電気を使わずにこれらの事を実現するため、現地のホームセンターでも手に入る、油圧ジャッキを用いました。これに、我々オリジナルのねじを使わない簡単な構造の搾油成型器を組み合わせることにしました。普及を考え、すべて現地で手に入る材料を使って、現地で組み立てを依頼しました。非電化村で試した結果、村人でも操作が可能なこと、バイオディーゼルの適した油がとれること、薪や炭の代わりとなるブリケットが作れることなどがわかりました。

今後この技術がモザンビークやその他アフリカの農村の生活向上に寄与することを願っています。



生物・環境工学専攻
生物機械工学研究室
かいづ 裕
海津 裕
准教授



図1. ジャトロファの実
和名：ナンヨウアブラギリ、実の重量の34%のオイルを含んでいる。プロジェクトでは現地の気候に適したジャトロファの品種改良にも取り組んだ。



図2. 電気を使わない、搾油およびブリケット製造器
搾油成型器に砕いて加熱した実を入れ、加圧することで油を絞る。また搾油成型器を加熱して再び加圧することで、毒性のないブリケットを作成可能。油は石油と混ぜてランプの燃料としたり、バイオディーゼルの燃料として発電機に使用する。

この記事に関する詳細情報はこちらまで
http://www.jst.go.jp/global/kadai/h2201_mozambique.html

江戸時代のマスオさん

21世紀の日本農業では、国の支援を受け、血縁のない第三者による経営の継承が増加しています。
最近の現象のように思われる第三者による経営継承ですが、実は江戸時代には広く行われていました。

今、日本の農業の現場では、少子高齢化のため後継者不足が問題になっています。多額の投資をして、農地と施設を整備して高い売り上げをあげても、その経営を受け継ぐ人がいないのは残念なことです。最近、国をはじめとした機関の様々な形の支援もあって、血縁のない第三者の間でも経営の継承が行われるケースが少しずつ増えてきています。継承者の中には、現在の経営者と養子縁組をする人もいます。なぜ養子縁組が必要なのでしょう？ そのヒントは江戸時代にありました。



実は、江戸時代の農業の現場では、マスオさんのような婿養子が数多く活躍していました。例えば、相模国大住郡横野村（現在の神奈川県秦野市大字横野）という人口300人の村を見てみましょう。19世紀後半のデータを見ると、村に60軒ある家のうち、25%の当主が前当主の実子ではありません。つまり、村の25%の家の当主がマスオさん、つまり婿養子か、あるいは血のつながらない養子なのです。そして、このような村は全国各地に存在していました。

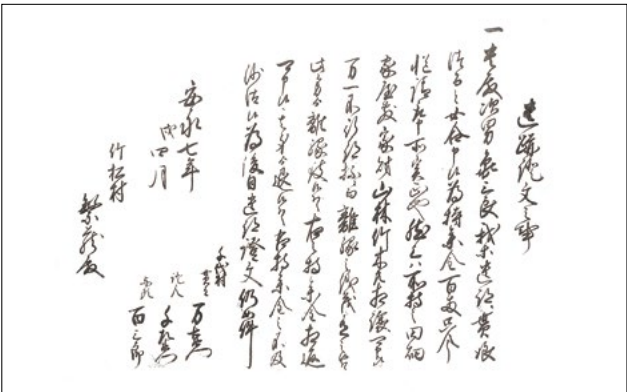
なぜ、江戸時代にはこれほどマスオさん（と血のつながらない養子）が多かったのでしょうか？ 最大の原因は、子供の死亡率の高さです。江戸時代には、現代のような少子高齢化現象こそありませんでしたが、生まれた子供の半分は成人する前に死んでしまいました。男の子のいない家や、全く子供のいない家も少なくありませんでした。当主が生きているうちに後継者が見つかった場合は、養子縁組をしました。当主に娘がいれば、婿を取りましたが（「遺跡証文之事」参照）、娘が嫁に行った場合、もしくは娘がいない場合は、養子だけを迎えました。また、当主の存命中に養子が見つからない場合は、村が空き家と農地を管理しながら、新しい後継者を探していました。後継者はすぐ見つかる場合もありましたが、10～20年ほどかかる場合もありました。また、新しい人が農業をやりやすいように、村が零細経営を整理・統合することもありました。こうして見つかった後継者は、村が管理してきた家や農地を譲渡され、前当主の養子として村に迎えられました（「一札之事」参照）。現代では個人や家族の問題としてとらえられがちな後継者問題ですが、江戸時代の人々は、このように村ぐるみで資源管理をしながら農業経営の後継者を探し、たくましく生きてきたのです。



農業・資源経済学専攻
農業史研究室
としいしなみ
戸石七生
講師



安藤広重「東海道五十三次」平塚



遺跡証文之事 (1778年)
竹松村の繁蔵の次男亀三良が千代村の万右衛門の養子になること、万右衛門の娘つと結婚すること、亀三良に持参金100両を持たせることが親同士の間で取り決められている。「遺跡」は秦野の方言で養子のこと。



一札之事 (1837年)
伊豆山村の玄秀が横野村の何兵衛の養子になるため、住所を移した記録。養子は独身とは限らず、妻子と共に養子入りするケースもあった。また、他の記録を見ると養親の何兵衛は養子縁組当時すでに死亡しており、村が空き家と農地を管理していたことが分かる。

弥生散策 キャンパスを歩き、街を訪ねる。

ボランティアサークル「までい」の活動を見学し、
分子育種研究室の日高真誠准教授と根津の居酒屋を覗く。



火曜日の午前中までに届けられた土や苔などがバイアルと呼ばれる試料瓶に詰められていく。作業は常時、10人ほどが集まって行われる。



手間ひま惜しまず

ボランティアサークル「までい」が誕生したのは東日本大震災から約1年半後の2012年秋。福島県飯館村の産業や生活の再生を支援するNPO法人「ふくしま再生の会」から、飯館村で採取された土壌や苔などの分析をしてほしいとの依頼がRI施設を備える農学部に入ったのがきっかけだった。しかし、解決しなければならない問題があった。土や苔をバイアルと呼ばれる試料瓶に詰める面倒な作業を「誰が」、「どこで」行うのか。事情を知るや、即座に行動したのが農学部職員を中心とする有志たちだ。職員用サークル室を使って、作業を自分たちが手分けして行うことを買って出たのである。ただし、サークル室を使う以上、新たにサークルを立ち上げ、大学に申請しなければならない。それが「までい」だった。「までい」とは「まじめに」「ていねいに」「手間ひま惜しまず」という意味の福島県の方言だ。

ボランティアサークル「までい」

震災復興のために役立ちたいという職員有志により2012年11月に発足。現在は学生や「ふくしま再生の会」在京メンバーも加わり、農学部サークル室で、飯館村で採取した検体の測定サンプルの作成を行う。

Madei is a dialect of Fukushima to mean "earnestly" and "heartfully".

サークル室で始まった活動は文字通り「までい」な取り組みが求められた。土や苔、ときには試験栽培した米などを瓶に詰め、番号を振り、質量を測定。さらに「いつ、どこで、どんな条件で採取されたか」を記録するデータベースの作成が「までい」の役割だ。すでに測定した試料瓶は1万3000本を超える。

メンバーは職員とそのOB、学生、研究者、「ふくしま再生の会」のメンバー約30人。当初、昼休みや終業後に行っていた作業は、現在、毎週火曜日午前中から1日ばかりで行われる。「学生を除けば、平均年齢は60代半ばでしょうか」と、世話人を務める齋藤富子さんは笑うが、皆さん、若い。澆刺としている。活動もサンプルの作成にとどまらず、放射線の講義など月に1度の勉強会も開いている。この行動力、好奇心、探究心。「までい」の心はこの先もずっと受け継がれていくはずだ。



世話人の齋藤富子さん。土壌が入った筒を2cm単位で切る工具も齋藤さんのアイデアの賜物。



帰ってきた真田剣士

不忍通りから一本裏に入った路地、赤ちょうちんがなければ、およそ居酒屋とは思えない築110年の古民家が「根津の甚八」だ。すっかり年季の入った引き戸を開くと、ほんのり暗い隠れ家風の空間。迎えてくれる女将の名上ケエ子さんはこの店を切り盛りし、今年でちょうど20年。二代目である。

とはいえ、初代とはまるで面識がない。実はこの店、もう30年以上前からあったが、一度は主人が店を畳んでいる。その後、数年後、「居酒屋を始めたい」と一念発起した名上さんが、たまたま不動産屋で紹介されたのがここだった。不本意だったが、不動産屋のアドバイスに従い、内装にもほとんど手を入れず、真田十勇士に由来する店名もそのまま使うことにした。すると、開店早々、店内は満員の客で埋まった。ここを鼻

屑にした人たちが再開を待ちわびていたのである。分子育種研究室の日高真誠先生も開店後まもなく馳せ参じた



一人。大学を卒業する頃から、つまり先代の時代から慣れ親しんできた店だ。女将さんが「縁あって、この地でお店を始めましたが、ほんとにお客様に恵まれています」と上品な笑みをもらう。

手際よく出される、とりの紅茶煮と煮玉子、かりかりじゃこ豆腐といった肴が酒好きにはたまらない。鴨鍋とねぎ鍋は冬場だけでなく、夏も人気の看板メニュー。日高先生はいつも日替わりの「本日の冷酒」を楽しみながら箸を進める。何しろ微生物は専門分野。昨年から生命化学・工学専修の学生実験で日本酒の試験醸造も開始しており、麹菌とは切っても切れない間柄なのだ。

店はカウンターが7席、奥に8畳の小上がり。一人飲みも、仲間とのワイワイも楽しい。この日も撮影が終わった夕刻、一人の男性客が入ってきた。聞けば、仕事を終えた後、一皿の肴でビールを飲み、サッと切り上げて帰宅するのが習慣だという。そんな江戸っ子らしい粋が絵になる店である。

Information



根津の甚八

住所: 文京区根津2-26-4 電話: 03-5685-1387
<営業時間> 17:30~22:00 土曜・日曜定休



古い格子戸とその向こうの和室が、池波正太郎の時代小説に出てきそうな雰囲気。

The tavern is 110-years-old folk house. The name comes from Sanada's brave warrior.



March

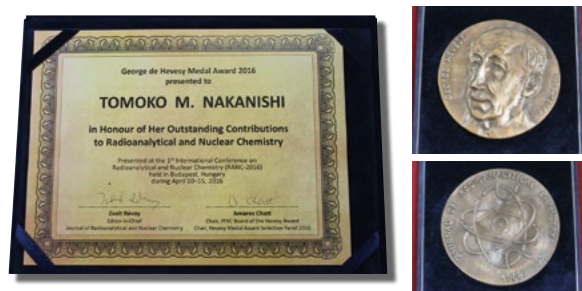
第12回放射能の農畜水産物等への影響についての研究報告会／ 中西特任教授のヘヴェシー賞受賞



3月26日(土)に弥生講堂・一条ホールにて、第12回放射能の農畜水産物等への影響についての研究報告会が開催され、今回は理学系研究科地球惑星科学専攻高橋嘉夫教授・小暮敏博准教授にも講演をいただきました。

また、本研究報告会を主催してきた中西友子特任教授は、長年培ってきた放射線や放射性同位元素を駆使したイメージング開発により、生きた植物における水と元素の動態の解析に成功したこと、ならびに、東京電力福島第一原子力発電所事故の調査研究が高く評価

され、放射科学や核科学の分野で秀でた業績をあげた研究者に与えられるヘヴェシー賞を受賞されました。ヘヴェシー賞受賞は日本人としては2人目になります。



April & May

附属牧場：仔馬の誕生



5月3日生まれ

4月30日生まれ

4月5日生まれ



8月、すっかり大きくなりました

附属牧場で、今年の4月5日、4月30日、5月3日にクリオージョの仔馬が生まれました。最初に生まれた仔馬は素直で大人しく、2番目は人懐っこいフレンドリー、末っ子は小さいけどやんちゃモノ! どの仔馬たちも個性豊かに育っています。この3頭にスペイン語での命名を一般公募したところ、200件近くの応募がありました。現在、名前を選考中、採用された方には牧場より記念品として血統登録書の写しと蹄鉄が贈られます。

April

生物生産工学研究センター研究報告会

2016年4月19日(火)、第5回目となる生物生産工学研究センター研究発表会が弥生講堂で開催されました。毎回参加者が100名を超える本発表会は、本センターの大学院生により運営されるもので、今回は、英語による9件の口頭発表と20件のポスター発表が行われ、質疑応答やディスカッションは、研究室の垣根を越え、お互いの研究内

容の理解を深めるとともに、活発な英語によるコミュニケーションを体験するよい機会となりました。また海外から招待した外国人招聘研究者2名の方にご講演いただき、国際学会さながらの集会となり、センター内外を問わず情報交換の場としても活発な研究討論が行われま



した。本センターでは、今後もこの学生主導の研究発表会を続けて参ります。

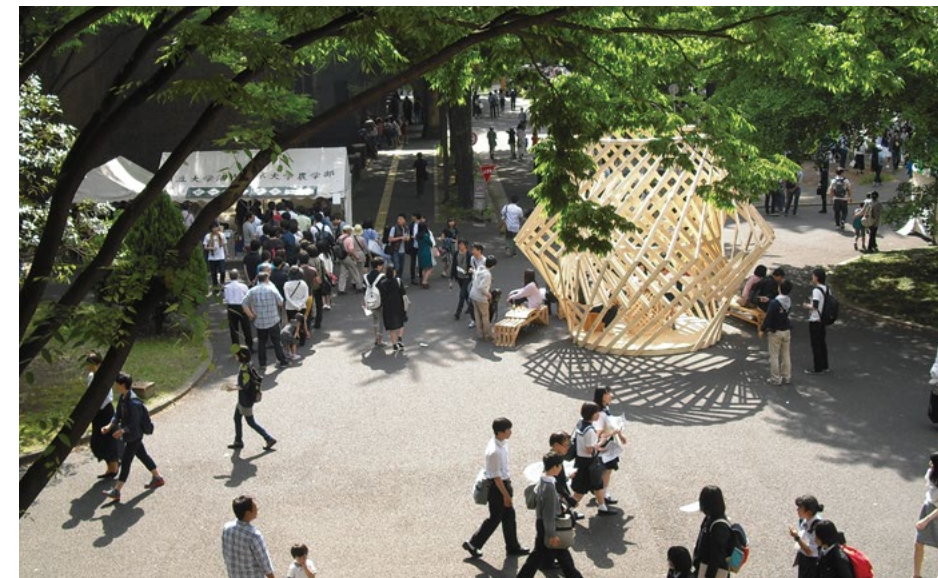
May

五月祭

5月14日(土)、15日(日)に第89回五月祭が開催されました。新緑の中、天気にも恵まれ、弥生キャンパスには多くの方にお越しいただきました。

人気行事としては恒例の「東大水族館 & うなぎ井」。朝から3号館はおいしい匂いに囲まれ、今年もうなぎ井を求める長蛇の列ができました。同じく恒例人気行事は農学部2号館の「利き酒」。興味深い展示と利き酒体験。最初にひと通りのレクチャーを受けた後、蔵元からご提供いただいた4種類の日本酒を試飲、それぞれの銘柄を当てていくというもので、みなさん、ご自分の味覚を頼りに銘柄当てに挑戦されていました。

小さなお子さんもたくさん来てくださり、3号館の



水圏生物科学専修主催の手作り水族館を見学したり、同館前に設置されたタッチプールでは三浦半島で採集した海の生き物に触れ合ったり、また、動物医療センターの横では乗馬部による乗馬やエサやり体験を楽しみ、親子連れの方たちにも楽しめるイベントとなりました。

一方、「東大の農力」では植物・昆虫系研究室の展示が行われ、ここには、中高生が多く足を運び、

じっくりと現役の学生から解説を受けていました。

おいしいものもいっぱい、上野英三郎博士とハチ公像をイメージした「元祖ハチ公焼」や三陸から直送の岩ガキなど新鮮な魚介の磯焼き、伊豆からは石窯ピザ、イノシシ肉燻製ソーセージ、植木市なども賑わいを見せ、今年度採用された木質構造パビリオンは見学者の憩いの場として人足が絶えない、大盛況の2日間となりました。

June

第50回農学部公開セミナー



6月18日(土)に第50回農学部公開セミナー「学と業」が、弥生講堂・一条ホールにて、開催されました。記念すべき50回目の公開セミナーは、3講師により、最新の研究が農業・産業・水産業の分野でいかに活用されているかをわかりやすく講演され、会場から溢れるほどの参加者の方々からはご好評をいただきました。次回は11月12日(土)です。お楽しみに。

August

オープンキャンパス

東京大学オープンキャンパスが8月3日(水)、4日(木)の2日間にわたり開催されました。

農学部では弥生講堂での模擬授業、学生による何でも相談コーナー、農学生命科学図書館の展示があり、研究室見学では動物医療センターや地下水槽の見学、微生物観察や走査型電子顕微鏡の操作・観察体験などが行われ、模擬授業では立ち見が出るほど多数の高校生が見学していました。



10月

■ 東大教職員向け特別ガイド「きのこに親しむ」

日時 10月1日(土)
場所 富士癒しの森研究所
問合せ先 富士癒しの森研究所
TEL:0555-62-0012
http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/fuji/

■ 神社山自然観察路秋季一般公開

日時 10月2日(日)
場所 北海道演習林
問合せ先 北海道演習林
TEL:0167-42-2111
E-mail:hokuen@uf.a.u-tokyo.ac.jp
http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/hokuen/

■ 第15回東京大学ホームカミングデー

日時 10月15日(土)
・農学生命科学研究科・農学部講演会
時間 15:45～16:45
場所 弥生講堂アネックスセイホクギャラリー
問合せ先 E-mail:koho@ofc.a.u-tokyo.ac.jp
・秋の収穫体験会
時間 9:30～14:30
場所 附属生態調和農学機構
問合せ先 E-mail:admin@isas.a.u-tokyo.ac.jp

■ 牧場公開デー

日時 10月29日(土)
場所 附属牧場
問合せ先 附属牧場事務室
TEL:0299-45-2606
http://www.bokujo.a.u-tokyo.ac.jp/

■ 千葉演習林一般公開「郷台畑へ行こう!」

日時 10月29日(土)～30日(日)
場所 千葉演習林
問合せ先 千葉演習林企画調整係
TEL:04-7094-0621
E-mail:chibaen@uf.a.u-tokyo.ac.jp
http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/chiba/

■ 子ども樹木博士認定会

日時 10月下旬
場所 田無演習林
主催 西東京市「子ども樹木博士」を育てる会
問合せ先 田無演習林
TEL:042-461-1528
http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/tanashi/

■ 公開講座「チョコレート作りを体験しよう!」

日時 10月下旬
場所 樹芸研究所
問合せ先 樹芸研究所加納事務所
TEL:0558-62-0021
E-mail:jyugeiken@uf.a.u-tokyo.ac.jp
http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/jyugei/

11月

■ 秩父演習林
創立100周年記念式典

日時 11月5日(土)～6日(日)
場所 秩父演習林
問合せ先 秩父演習林利用者窓口
TEL:0494-22-0272
E-mail:chichibu-riyou@uf.a.u-tokyo.ac.jp
http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/chichibu/

■ 第51回農学部公開セミナー

日時 11月12日(土)
場所 弥生講堂一条ホール
主催 大学院農学生命科学研究科・農学部
共催 (公財)農学会
問合せ先 総務課総務チーム広報情報担当
TEL:03-5841-5484／8179
E-mail:koho@ofc.a.u-tokyo.ac.jp

■ A1ターム授業終了 11月18日(金)

■ A2ターム授業開始 11月21日(月)

■ 休日公開

日時 11月下旬
場所 田無演習林
問合せ先 田無演習林
TEL:042-461-1528
http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/tanashi/

12月

■ 東大教職員向け特別ガイド

日時 12月3日(土)
場所 千葉演習林
問合せ先 千葉演習林企画調整係
TEL:04-7094-0621
E-mail:chibaen@uf.a.u-tokyo.ac.jp
http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/chiba/

■ 休日公開

日時 12月上旬
場所 田無演習林
問合せ先 田無演習林
TEL:042-461-1528
http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/tanashi/

1月

■ A2ターム授業終了 1月20日(金)

■ Wターム授業開始 1月27日(金)

2月

■ Wターム授業終了 2月23日(木)

3月

■ 学位記授与式 3月23日(木)

■ 卒業式 3月24日(金)

弥生講堂16年



東京大学弥生講堂は2000年3月に開館しました。早いもので16年の歳月が流れています。補助椅子を使えば300名程度のセミナーを開催することが可能な一条ホールを中心に木造建築として計画・建設されました。その広さについては農学部への進学生が一同に着席できるホールとすることを念頭に置き、岩手県遠野産のカラマツ集成材により空間が構成されました。建設当時、農学部125周年記念事業の寄付建物として位置付けられ、浜松に本社がある住宅会社の一条工務店による寄付と施工によって完成しました。完成後今日まで予約が最も取りにくい大学施設として多くの方々に利用されています。利用率が高いことから定期的な点検や日常のメンテナンスによって最良の状態を維持できており、当初より木の色も落ち着いて良くなっていると言えそうです。

エピソードも数々生まれています。ホール建設当初は椅子の座面に現在では置かれているクッションがなく、

合板の座は滑りやすい状態でした。あのホールでは寝にくいとクレームを受けたこともあり、苦笑いしたことも懐かしい思い出です。ロビー部分には柱が林立しており、話に夢中になり頭をぶつける方もいるようです。熱心な議論が行われることは好ましいのですが、木材とは言えぶつかれば痛いのでご注意ください。

なぜ木造なのか…わが国で戦後造林した木材資源が成長して利用可能になり、2010年には「公共建築物等木材利用促進法」が制定されました。今や積極的な木材利用の時代に入っていますが、先駆的な木造建築物の好例として評価を得ており、現在も見学者が多いのも弥生講堂の特徴です。その後、弥生講堂アネックス(2008年)、東京大学ファカルティハウス(2009年)と弥生キャンパスにはそれぞれ異なる目的のために木造建築が建てられ、大学での様々な活動、とりわけ農学系の研究活動の拠点としてその役割を果たしています。



安藤 直人 東京大学名誉教授
(寄付講座木質構造学研究室 特任教授(28年3月終了))

弥生 63

Yayoi

Fall
2016

編集後記

「羽ばたく」には2つの意味があります。「鳥などが両翼を広げて上下に動かす」、「実力をつけて広い社会へ出ていく」(デジタル大辞泉、小学館)。
大学ではまず第2の意味が思い浮かびます。大学からは毎年多くの卒業生・修了生が、実力をつけて広い社会へ出ていきます。大学での様々な活動でも、例えば新しい研究成果を世に問う時など、羽ばたく機会はしばしばあります。大学は羽ばたきを育む場と言えるでしょう。今号の弥生でも、羽ばたきを育む幅広い教育、研究、アウトリーチ活動が紹介されています。

私が居る研究室は6階で、キャンパス上空をカラスやハトが飛び交う様子を見おろせます。当たり前ですが彼らの生活空間は3次元で、追いかけても、えさや巣の材料の運搬も、すべて3次元空間でやっています。眺めていると、2次元空間で暮らす私たちとは全く別の異次元の世界で暮らしていることが改めて実感されます。「羽ばたく」の第1の意味は、まさにこの別世界へ力強く飛び出していく動きを含み、転じた第2の意味を私たちは違和感なく受け入れられます。
これからも、卒業生・修了生の力強い羽ばたき、農学部・農学生命科学研究科の大きな羽ばたきにご期待ください。

広報室員 飯田俊彰

青春時代、胸に刻んだ使命感



獣医学専攻
獣医繁殖種学研究室

前多敬一郎 教授
Keiichiro Maeda

これまでの人生を振り返ると、いくつかの偶然がまるで運命の糸で手繰り寄せられるようにして、今、自分はここにいるのだと思うことがあります。しかも、私を導いた偶然のほとんどは人との出会いでした。

大学2年のとき、畜産獣医学科への進学を決めたのも、たまたま望月公子先生が進学ガイダンスをしている声を耳にしたからです。廊下を歩いていると、聞こえてくるのは「麻雀」、「酒」という言葉。どちらにも目がない私はつい教室に入り、気がつけば望月先生の話に聞き入っていました。「牧場での臨床実習は授業が終わったら麻雀して酒を飲み、翌朝早く、また農家に実習に行く。君たちにそんな体力はあるか」といった話にすっかり感心し、「これはいい。私にぴったりだ」と、獣医になることを決意しました。

4年になった頃には酪農が盛んな北海道で産業動物の獣医として働くつもりでした。それが一転し、大学院に進んで研究者としての道を歩み始めたのもやはり

出会い。4年の夏、臨床繁殖学の集中講義があったのですが、農林省の畜産試験場（現・農林水産省畜産草地研究所）から来られていた森純一先生の講義がとにかく面白く、興味を惹かれました。このとき森先生が熱く語られた牛の不妊治療の講義を聞かなければ、今頃、私は北海道で獣医をしていたでしょう。

大学院でよく学び、よく遊んだ時代も忘れられません。とりわけ一昨年に亡くなられた森裕司先生との出会いです。お互い、まだ20代。私にとってはまさに兄貴のような存在で、森先生と附属牧場で新たな研究分野に挑んだ日々は貴重な財産です。附属牧場は私にとって青春の象徴であり、心のふるさと。今も附属牧場に行くと、不思議と気持ちがなごみます。

思えば、私が出会った方はみんな「自分の研究は人間の食を支えている」という強い使命感の持ち主でした。農学部に進んで以来、私もそれを胸に刻んできました。そして、そのような使命感を若い研究者に伝えていくことが私の役目であると思っています。